

ソーシャルワークにおける省察的実践支援ツールの構成指標の検討

加藤由衣¹

(2020年9月25日受付, 2020年12月14日受理)

An Examination of the constituent indicators of reflective practice-assisted tool for social work

Yui KATO¹

(Received : September 25, 2020, Accepted : December 14, 2020)

要 旨

省察的実践は、ソーシャルワーク実践においてその重要性が認められている一方で、理論の曖昧さや理論化の困難さが指摘されている。このような状況のなかで本稿は、ツールを介した省察的実践理論の実践化を目指して、省察的実践支援ツールの開発に向けた構成指標の検討を行った。具体的には、ソーシャルワーク実践の4大構成要素を枠組みとして先行研究から質的帰納的分析を行い、省察的実践支援ツールの構成指標を構造化した。そして、今後の省察的実践支援ツールの開発課題と展望をまとめた。

キーワード：省察的実践, 省察的実践支援ツール, アセスメント, 批判的省察

Abstract

While the importance of reflective practice has been recognized in the context of social work practice, attention has also been drawn to its theoretical ambiguity and difficulties entailed in its theorization. Given this state of affairs, this paper seeks to examine component indicators for developing reflective practice-assisted tool, with the aim of comprehensively integrating theory and practice through these tools. Specifically, using the four major components of social work practice as a framework, this paper conducted a qualitative inductive analysis based on previous studies to structure component indicators for tools that would support reflective practice, and then summarized development challenges and future prospects for such tools.

Key Words : reflective practice, reflective practice-assisted tool, assessment, critical reflection

¹ 高知県立大学社会福祉学部社会福祉学科・講師・博士(福祉社会学)
Department of Social Welfare, Faculty of Social Welfare, University of Kochi, Assistant Professor (Ph. D.)

I. はじめに

省察や省察的实践は、ソーシャルワークや看護、教育などさまざまな対人支援専門職のなかでその重要性が語られてきた。それは、対人支援専門職が、日々固有な利用者や状況・場面に対応する必要があるからである。そのなかで専門職は、常に目の前の状況を瞬時に捉え、その場その場で適切な対応をしていかなければならない。こうした対人支援専門職の实践特性をふまえ、Schön (1983) が「省察的实践家」という新たな専門職モデルを示したのである。

Schönは「実践者が不確実性と不安定さ、固有性のある状況や、価値観の葛藤が生じている状況に適切に対応する際の『わざ (artistry)』の中心は、行為のなかの省察というプロセス全体にある」(Schön1983: 50) として省察の重要性を説いた。そして彼は、ソーシャルワーカーなどの対人支援専門職は、实践活動をふり返ったり、实践を行いながら省察したりする实践的思考スタイルにこそ専門性があると主張したのである。

Schönの研究以来、省察的实践が注目されるようになり、多様な研究が進められてきた。しかし一方で、その理論の曖昧さや省察的实践そのものが不明確であるという問題が、しばしば指摘されている。こうした曖昧さは、実践者にとっても、いかにして省察的实践を遂行するかを学んだり、自らが省察的实践家となり得ているかを確認したりするのを困難にしていると考えられる。

たしかに、そもそも省察的实践は暗黙的な要素を含むもので、言語化されていない実践者の行為に専門性を見出すものである。しかしながら、省察的实践家の育成や、実践者による自身の省察的实践の確認には、省察的实践の理論を实践に具現化する何らかの手立てが必要であると考えている。そしてそれこそが、省察的实践という理論の一大課題といえる。

こうした課題に対して本研究では、省察的实践の理論とその实践とを結びつけるツールを活用することが有効であると考えた。そこで本稿では、

省察的实践の理論的な特性をふまえ、省察や省察的实践を支援するツールの開発を目指すことで、ツールを介した省察的实践の方法を検討していく。それにより、理論の曖昧さが指摘される省察的实践において、实践現場で活用可能な实践モデルを探究する手がかりとしたい。

II. 省察的实践にみられる課題

1. 实践化への課題

省察的实践は、その重要性が指摘される一方で、实践にともなう問題も指摘されてきた。それは、实践行為が省察や思考の結果であるかどうか不明らかでなく、省察できたと他者が測定できないという問題 (Iker2016) や、省察の定義や構造の曖昧さゆえに、促進・抑制する要因や変数が不明確であるという問題 (Wilson2013) である。そして、省察的实践を構成する要素や、省察的实践がどのように現実化されるかが不明確なことも、大きな問題としてあげられている (Ruch2002)。

このような实践化の困難さの背景には、省察的实践がソーシャルワーカーという人に関わる理論であることが一因としてあげられる。つまり、省察的实践は、不確定な状況のなかで「わざ (artistry)」を活かしながら实践する主体としてのソーシャルワーカーに着目しているといえるのである。ゆえにその理論は、ソーシャルワーカーの思考やソーシャルワーカーの内に存在する暗黙的要素を包含することが特徴と考えられる。そのため、他のソーシャルワークの实践モデルやアプローチのように、他者と共有できる具体的な展開や行動を描きづらいためである。

こうした实践化の課題のなかで、省察的实践における实践モデルの構築を目的に、価値・知識・方策・方法というソーシャルワークの4大構成要素を枠組みとして、省察的实践の实践特性の整理を試みてきた (加藤2019)。そして、4つの構成要素にみられる省察的实践の特徴を提示した (表1参照)。

若干説明を加えると、省察的实践の価値要素と

表1 ソーシャルワークの構成要素にみられる省察的実践の特性

価値	知識	方策	方法
① いまこの瞬間の行為や性質など、自分自身の全体像の受け止めと認識 ② 自らの感情の理解 ③ 実践や省察、専門職としての発展に対する信頼と責任、開かれた姿勢	① 形式知と実践知の双方の重視 ② 形式知と実践知の相互作用による、実践での効力の発揮・向上 ③ 実践や経験に含まれる実践知から知識の創造	① 実践機関や制度・政策、サービスなど、メゾ・マクロシステムへの批判的視点と変革の姿勢 ② 他職種や利用者など他者の捉え方や考えの認識・受容 ③ ソーシャルワーカー自身や自らの基盤、利用者への影響の問い直し	① 理論的な実践と実践の理論化の双方向のアプローチ ② 過去から学び、現在・未来へと活かす、過去・現在・未来を包括したプロセス

知識要素は、主に省察的実践家としてのソーシャルワーカーの内的世界を特徴づけていることがわかる。つまり、ソーシャルワーカーの姿勢や感情と、ソーシャルワーカーの内に存在する知に関する内容である。

一方で方策要素と方法要素は、ソーシャルワーカーを取り巻く時間的・空間的側面への視野や展開を示している。具体的には、ソーシャルワーカーと環境との相互作用への意識や、内的・外的環境に対する姿勢や取り組みといった、システム的な理解と行動を表すのが方策要素である。また方法要素では、理論と実践の双方向のアプローチから両者を統合しながら、過去・現在・未来という時間的流れのなかで、省察的実践家としての発展を目指すプロセスを示している。

以上の省察的実践の4大構成要素に関わる特徴をふまえて、次には、これらをいかに実践に具現化していくかという課題が浮上する。そしてそれが本研究の一大課題と捉えている。しかし、すでに言及してきたとおり、省察的実践はソーシャルワーカーという人に関する実践理論ゆえに、思考や知、まなざしといった内的世界を目に見える形で共有することの困難さがある。そこで、この課題を乗り越えるための方法として本研究で着目するのが、ツール（道具）を介した理論の実践化である。

ソーシャルワークの実践ツールで代表的なものとしては、「ジェノグラム」や「エコマップ」といったマッピングのツールがあげられる。ジェノグラムは「世代関係図」とも呼ばれ、三世以上を拡大家族で繰り返される行動パターンや問題の連鎖性の発見、家族成員に影響を及ぼしたライフイベ

ントの理解に有効とされる（黒木ら2002：208）。またエコマップは、人と環境の交互作用に着目し、当事者をめぐる社会関係網の実態を視覚化するものである。

これらのツールは、ソーシャルワークの理論を実践場面でいかに具現化するかを模索し、開発されてきたものである。たとえばエコマップは、ソーシャルワークに生態学の理論が導入され、病理モデルから生活モデルへと移行するなかで開発された。当時、生態学の理論に基づく支援方法という課題を抱えるなかで、エコマップは理論を具体化する方法の一つとして、Hartman, A.によって考案されたのである。このように、ソーシャルワークの実践ツールには、理論基盤や実践モデルを実践活動へと結びつける役割が期待されているといえよう。

2. ツールを介した省察的実践理論の実践化

省察的実践にかかわるツールの現状をみてみると、実践記録が省察を促進するツールとしてしばしば取りあげられ、記録作成が省察に有効であるとの指摘がみられる（Bolton2014；保正2015）。保正によると記録の意義は、「記録を通して自己省察することにより実践力を高め、実践の質向上をはかる。そして、ソーシャルワーカーとしてのアカウントビリティの遂行を行う」（保正2015：18）こととされる。またBolton（2014）は、省察的記録が心のなかにある混沌とした要素を照合したり理解したりできるようにするとして、省察的記録の役割をまとめている（表2¹⁾参照）。

保正やBoltonの指摘からもわかるように、記録は、自分のなかで実践状況や自分自身を客観的か

表2 省察的記録の役割

- ・離れたところからの広い視野を促進する
- ・近くからの鋭い観察を容易にする
- ・重要な他者（たとえば利用者）からの気づきを促進する
- ・実践をめぐる権威への理解を深める
- ・前提に対する批判的で挑戦的な姿勢を促す
- ・専門的、学術的な文献との有益な関係を深める

つ広い視野で見つめるとともに、自らの姿勢を問うことを促す役割がある。特にBoltonが提示した省察的記録の役割では、実践を取り巻く権威や自らの前提にも批判的な目を向けることを期待しているのがわかる。これらは、近年の省察的実践で重視される、批判的省察 (critical reflection)²⁾ や再帰性 (reflexivity)³⁾ の考えを含んだものといえるだろう。つまり、自身の基盤や活用する理論、そして組織などのシステムそのものを問う姿勢である。

このように省察的記録には、目の前の実践に加えて、基盤となる考え方や自身の特性、ソーシャルワーカーを取り巻くシステムなどにも向き合うことで、実践への認識を深め、省察の力を向上させていくことが期待できる。その意味で、Boltonの省察的記録は、省察的実践家としての成長に貢献するツールになると考えられる。

一方で、こうした実践記録は、実践をふり返りながら記述したり、それを他者と共有したりするなかで省察の力を高めていこうとするものである。すなわち、「書く」という行為をとおして省察的実践家としての力量向上を目指しているといえる。しかし本研究が目指すツールは、ソーシャルワーカーが省察的実践家としての現在の自分の状況を客観的に捉え、省察的実践家としての発展への糸口を模索することを支援するツールである。そのためには、省察的実践という枠組みからソーシャルワーカーとしての現状を認識し、ふり返りを促すツールが求められる。

この観点でソーシャルワーク実践に関するツールを概観すると、ソーシャルワーカーが自身の状況を客観的に把握し、それをもとに次の適切な行

動へとつなげることを目的として、南ら (2004) によって開発されたのが「ソーシャルワーク専門職性自己評価 (Social Work Proficiency Inventory)」である。彼女らは、ソーシャルワーカーが7領域の評価尺度から自らの専門職性を評価し、ソーシャルワーカーとしての自己の姿を総合的に理解するための自己評価法を開発した。その内容をみてみると、使命感、倫理性、自律性、知識・理論、専門的技能、専門職団体との関係、教育・自己研鑽の7領域について、それぞれの概念を具体化する42の下位項目からなる評価票が作成されている。そしてソーシャルワーカーが各項目に5段階評価でチェックし、それを点数化した結果をグラフやレーダーチャートで確認するという方法である。この専門職性自己評価は、省察的実践に関するツールではないものの、ソーシャルワーカーの現状認識のツールとしては参考になる点が多いだろう。

また、ソーシャルワーカーが自らを客観的に把握・評価するツールというアイデアとともに着目したいのは、太田 (1989) が提唱した、ツールを通じて理論と実践の包括・統合化を試みるエコシステム構想である。エコシステム構想は、コンピュータを活用して利用者の生活エコシステム情報を把握し、利用者と支援者が生活に対する認識を共有できるようにするもので、エコシステム視座を実践に具体化していこうという発想と方法である (太田ら2005)。この発想に基づき、コンピュータ支援ツール「エコスカナー」が開発された。

また近年では、エコシステム構想を基盤としながら、メゾ・マクロ領域の活用へと展開する新たな実践支援ツールのモデルも紹介されている (太田ら2017)。そのなかには、スーパーバイジーが、自らの生きる身近な生活コスモスと意識・現実といった生態をアセスメントし、課題や展望を考察することを支援する「スーパーバイジー支援ツール」なども存在する。このようにエコシステム構想は、支援者が自らのエコシステム状況を把握し、

その改善や発展を目指すためのツールとしても活用されつつある。

ここで重要なことは、スーパーバイザー支援ツールなどを活用し、支援者自身の生活コスモスを認識したり課題を考察したりすることの目的が、実践の向上にあるという点である。つまり、支援者に焦点化したツールであっても、利用者への支援の質を高めることに寄与できなければ意味がなく、利用者支援を見据えたツールであるという視点が不可欠である。

このように利用者支援の向上を目指しつつも、ソーシャルワーカー自身に焦点化したツールの開発を目指すのは、ソーシャルワークが実践科学という特徴を有するためである。つまりソーシャルワークの理論は、ソーシャルワーカーという人を介して実践で体現させるため、ソーシャルワーカーが「道具としての自己」を高め、支援に活かせるようにしていくことが重要となるのである（北本2010）。それゆえソーシャルワーカーは、一方ではソーシャルワークの理論に精通していることと、他方で道具としての自己を向上することが求められる。

本研究で開発を目指している省察的実践を支援するツール（以下、省察的実践支援ツール）は、まさにソーシャルワーク実践における「道具としての自己」の向上を支援するものと考えている。そしてその成果が利用者支援に結びつき、効果的な実践に寄与することが、本研究の目指すところである。このような省察的実践支援ツールの意図をふまえつつ、省察的実践家に求められる要素をツールに組み込むことで、曖昧さが指摘される省察的実践理論の実践化にチャレンジしていきたい。そのためには、ソーシャルワーカーの実践状況と組織やシステム、さらに自らの基盤へのまなざしなど、省察的実践の理論を具現化し、ツールに導入することが重要と考えている。

なお、先に紹介したエコスキャナーは、現在コンピュータのシミュレーション機能を修正し、操作性や視覚的な見やすさを高めた「eスキャナー」

として開発されているところである。そのため、コンピュータを活用して情報を処理することで、ソーシャルワーカーの視覚的な状況認識を容易にするという点でも、eスキャナーの発想は有用であると考えている。そこで本研究では、エコシステム構想によるeスキャナーを基盤に、省察的実践支援ツールの開発を進めていきたいと考えた。

Ⅲ. 省察的実践支援ツール開発に向けた検討

1. 研究方法

eスキャナーは、人と環境からなる生活の広がりや構成指標として配列し、それに基づく質問項目に利用者やソーシャルワーカーが回答する仕組みになっている。そしてその結果をグラフ化することで、ミクロからマクロにわたる利用者の生活状況を、利用者とソーシャルワーカーが視覚的に認識し、共有できるようにするツールである。省察的実践支援ツールは、このコンピュータ・システムを活用し、省察的実践家であるソーシャルワーカーの状況を視覚的に認識できるようにしたいと考えている。図1は、省察的実践支援ツールのイメージを図示したものである。

図1に示したように、ソーシャルワーカーは、まず省察的実践支援ツールに組み込まれた省察的実践に関する質問項目に回答していく。この回答するプロセスをとおして、ソーシャルワーカーは、省察的実践家としての自己を客観視したり、自らの基盤をふり返ったりすることができる。また、質問項目への回答結果がコンピュータ・シミュレーションによりグラフ化されるため、ソーシャルワーカーは、その結果を見ながら省察的実践家としての自己に対する気づきを得るとともに、改善点の認識ができるのである。

このようなツール活用のイメージを具現化するために、省察的実践支援ツールでは、省察的実践家としてのソーシャルワーカーの状況に関して、省察的実践の実践特性をふまえた構成指標を配列していく必要がある。その手がかりとなるのが、省察的実践の実践モデル開発を目的に、ソーシャ

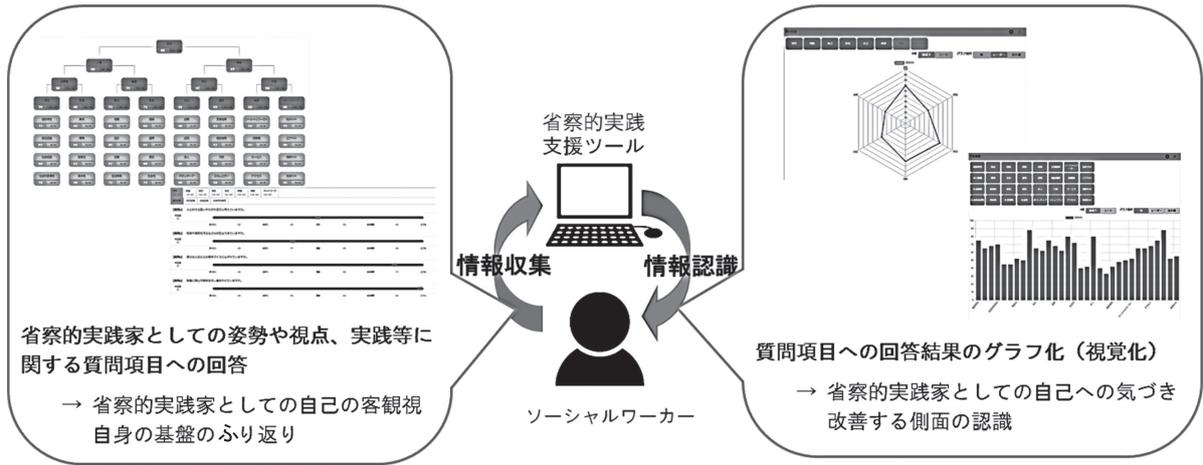


図1 省察的実践支援ツールのイメージ

ルワークの4大構成要素から整理してきた省察的実践の特性である。そこでは、ソーシャルワーカーの内的要素と外的要素、そしてソーシャルワーカーを取り巻く時間的・空間的側面というように、ソーシャルワーカーの状況の広がりをも、特性として整理できた。

そこで本稿では、この価値・知識・方策・方法という4つの構成要素に関する実践特性をもとに、その具体的な内容を分析・検討していくことで、省察的実践支援ツールの構成指標の生成を試みていくこととする。具体的には、加藤（2019）に基づき、図2に示した分析枠組みで、省察的実践の価値・知識・方策・方法にかかわる構成指標を検討・生成していきたいと考えた。そのために、以下の方法で省察的実践の構成指標の生成と構造化を進めた。

- 1) 先行研究からの省察的実践に関する項目の抽出・コード化
- 2) 質的帰納的分析による省察的実践支援ツールの構成指標の生成
- 3) エコシステム構想に基づく省察的実践支援ツールの構成指標の構造化

まず、1) 省察的実践に関する項目の抽出・コード化では、省察的実践をテーマとする先行研究から、省察的実践の実践特性にかかわる項目の抽出を行った。特に本研究では、価値・知識・方策・方法

の分析枠組みから構成指標を生成していくため、先行研究から、図2の各要素の内容に関わる記述を抽出し、コード化した。なお、省察的実践に関する文献は非常に幅広く発表されており⁵⁾、全ての文献から省察的実践支援ツールの項目を抽出することは困難であった。そのため、本研究では、ソーシャルワークにおける省察的実践の主要な文献を含む25の文献をもとに分析を行った⁶⁾。

次に、この作業をとおして得られたコードをもとに、2) 質的帰納的分析による構成指標の生成では、抽出したコードを内容の類似性と相違性に着目しながら、研究テーマに沿ってカテゴリー化することで、個別・具体的な項目から概念レベルへと抽象度を高めていく作業を行い、第1次カテゴリーを生成した。さらに第1次カテゴリーについて同様の作業を実施し、第2次カテゴリーを生成した。

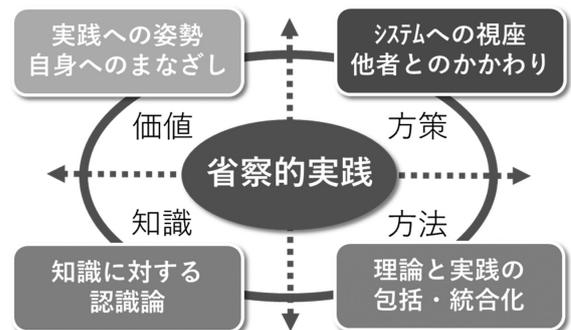


図2 省察的実践の構成指標に関する分析枠組み

こうして得られた第2次カテゴリーをもとに、
 3) エコシステム構想に基づく省察的実践支援ツールの構成指標の構造化では、演繹的観点と帰納的観点の相互性を意識して構成指標の分析を進めた。若干説明すると、エコシステム構想では、生活を系統的に把握するために、生活支援にかかわる情報をエコシステム情報として構造化して整理している（太田2003）。そこでは、「生活」という広がりをもった固有な状況を包括・統合的に把握するために、まず「人間」と「環境」という領域に2分割し、それを分野・属性・内容へと細分化していくことで、生活内容を指標としてまとめている。そこで本研究の省察的実践支援ツールの構成指標の検討においては、省察的実践をソーシャルワークの4つの構成要素の枠組みから検討していくため、「省察的実践家」としての現状や状況を、「価値」「知識」「方策」「方法」という4つの領域に分割し、それを属性・内容へと細分化する作業を進めることとした。

以下の文中では、分析から得られた第1次カテゴリーを「 」, 第2次カテゴリーを『 』の記号を用いて表記する。

2. 分析結果

先行研究からの省察的実践に関する項目のコード化とコードの質的帰納的分析では、4つの構成要素に関して以下の分析結果が得られた（表3～表6参照）。

(1) 価値

まず、価値要素に関する項目では、『自己認識』『自己受容』『感情への意識』『開放性』『想像性』『創造性』『役割意識』という7つの第2次カテゴリーが生成できた（表3参照）。

具体的に、価値要素の特徴である自身へのまなざしに関しては、実践者としての「自己への気づき」や「自己覚知」「別の側面への気づき」「マインドフルネス」といった『自己認識』とともに、「信頼する」ことや「自尊心をもつ」こと、「不安

表3 価値要素に関する分析結果

第1次カテゴリー	第2次カテゴリー
自己への気づき	自己認識
自己覚知	
別の側面への気づき	
マインドフルネス	
信頼する	自己受容
自尊心をもつ	
不安の受容	
感情の理解	感情への意識
感情表出	
開かれた態度	開放性
広い視野	
自発的な姿勢	
想像力	想像性
疑問を抱く	
関心をもつ	
鋭い観察	
創造性	創造性
新たなアイデアの具体化	
生成的プロセス	
誠実である	役割意識
責任をもつ	
役割の理解	

の受容」からなる、『自己受容』が、省察的実践で重視されている。また省察的実践家には、自らの「感情の理解」や「感情表出」など、『感情への意識』をもつことが求められている。

次に、価値要素のもう一つの特徴である実践への姿勢に関しては、「開かれた態度」や「自発的な姿勢」をもち、「広い視野」で物事を捉える『開放性』と、「想像力」や「疑問を抱く」ことなどの『想像性』が必要になる。さらに、「新たなアイデアの具体化」や「生成的なプロセス」が含まれる『創造性』や、「誠実である」「責任をもつ」「役割理解」といった『役割意識』も、省察的実践の重要な姿勢である。

(2) 知識

次に知識要素に関する内容の分析からは、『理論知』『実践知』『直観』『経験』『知の包括性』『知の創造』『知識と実践』という7つの第2次カテゴリーが得られた（表4参照）。

表4 知識要素に関する分析結果

第1次カテゴリー	第2次カテゴリー
理論からの知	理論知
調査からの知	
実践からの知	実践知
過程知	
技	
直観	直観
暗黙知	
無意識の知	
経験	経験
体験的素材	
包括的な知	知の包括性
知識の統合	
開かれた知識	知の創造
知識の創造	
知識の可視化	
知識と実践の関連	知識と実践

まず知識の種類に関してみていくと、省察的实践では理論や調査を基盤とした知である『理論知』と、『実践からの知』『過程知』『技』といった『実践知』が重視される。さらに「暗黙知」や「無意識の知」など、経験を通じた言語化できない『直観』や、「体験的素材」としての『経験』が、知を形成する要素として生成された。

これらの知や知の素材の特徴に加えて、「包括的な知」や「知識の統合」に示されているように、『知の包括性』が省察的实践の知識の特徴としてあげられる。また、省察的实践では、「開かれた知識」という認識のもと、「知識の創造」や「知識の可視化」といった『知の創造』の役割も期待されている。そして、知識が常に実践に関連しているという意味で、『知識と実践』も重要な要素となる。

(3) 方策

方策要素に関しては、『協働的対話』『他者の理解』『相違の理解』『利用者』『システム』『権力への対応』『自己へのまなざし』という7つの第2次カテゴリーが生成できた(表5参照)。

具体的に、他者との関わりに関する内容では、

表5 方策要素に関する分析結果

第1次カテゴリー	第2次カテゴリー
対話の重視	協働的対話
協働する	
他者の認識への着目	他者の理解
他者の経験への着目	
違いの認識	相違の理解
異なることへの対応	
対立の受容	
利用者の理解	利用者
固有な状況の理解	システム
組織の状況	
力関係の理解	権力への対応
権力の理解	
力関係への働きかけ	
自己基盤への批判的姿勢	自己へのまなざし
自己の影響の気づき	

「対話の重視」「協働する」など、省察的实践における『協働的対話』の特徴がみられた。またその際には、「他者の認識への着目」「他者の経験への着目」というように、『他者の理解』が重要となる。同時に、「違いの認識」や「異なることへの対応」「対立の受容」といった『相違の理解』の姿勢が、省察的实践には求められていると考えられる。

またシステムへの視座では、『利用者』『システム』という要素が生成された。一つには、現在自身が関わっている「利用者の理解」など、『利用者』へのまなざしが不可欠である。加えて、ソーシャルワーカーの実践を取り巻く「固有な状況の理解」や「組織の状況」など、『システム』に関するまなざしと理解が必要となる。そして、そうしたシステムに含まれる「力関係の理解」や「権力の理解」「力関係への働きかけ」といった『権力への対応』が重要であることがわかる。一方で、「自己基盤への批判的姿勢」「自己の影響の気づき」といった批判的な視点から、『自己へのまなざし』というカテゴリーを生成した。

（４）方法

最後に方法要素では、『経験への意識』『行為の前の省察』『自己との対話』『行為の理解』『実践の変容』『理論と実践の関連』『未来の実践』『専門的自己の発達』の8つの第2次カテゴリーが生成できた（表6参照）。

省察的実践では、省察的実践家としてのソーシャルワーカーをとおして理論と実践の包括・統合化を図っていく。そのなかでは、「経験に対する気づき」や「経験からの学び」といった、それまでの『経験への意識』が求められる。また、こうした経験への意識をふまえて『行為の前の省察』を行う。そして実践行為のなかで、「行為のなかの省察」や「記述する」「内面で対話する」といった方法による『自己との対話』を繰り返していく。さらに、「行為についての省察」をしながら、「現在の行為との関連」を理解し、「行為への気づき」を得て、『行為の理解』をしていく。そこから、「省察の成果を実行する」ことや「行動の変化」といった、『実践の変容』に結びつけていくことが、省察

的実践の重要な特徴と考えられる。

このような行為のなかの省察や行為についての省察をとおして、「理論的な実践」と「実践の理論化」を行うなど、省察的実践では『理論と実践の関連』を体現していくことが不可欠である。そして、省察の成果は、「レパトリーの広がり」として蓄積されるとともに、「未来を見据える」ことで『未来の実践』に活かすものとなる。この一連の省察のプロセスを通じて、省察的実践家として「コンピテンスの発達」や「専門的アイデンティティの発達」といった『専門的自己の発達』を可能にしていくのである。

IV. 省察的実践支援ツール開発への展望と課題

1. 分析結果からの考察

省察的実践は、Schön（1983）が提唱して以来、「行為のなかの省察」と「行為についての省察」という実践的思考を特徴としてきた。また、当初から暗黙知に代表される言語化されない知の存在を重視してきた。その後、研究の広がりとともに、批判的な視点も取り込みながら（Fook2010；Bolton2014）、省察的実践家としての姿勢や感情面も着目されるようになった（Taylor2006；Bruce2013；Thompsonら2018）。分析結果からは、こうした幅広い姿勢や視座、省察的実践に求められる行動が具体化して示された。そして、省察的実践家としての全体像の具体的内容が明らかになった。

これらの内容で重要なことは、自分自身の状況を見つめる項目とともに、実践やそこに存在する利用者へのまなざしを含んでいることと考えている。たとえば価値要素の『開放性』『想像性』は、利用者支援において、利用者を含めた他者の見解を柔軟に取り込みながら視野を広げていくことや、想像力を働かせて目の前の利用者の状況を捉えることを重視する。そうした視野や姿勢と『創造性』をもつことで、利用者にとって最適な支援を創りあげていくことが可能になるであろう。

表6 方法要素に関する分析結果

第1次カテゴリー	第2次カテゴリー
経験に対する気づき	経験への意識
経験からの学び	
行為の前の省察	行為の前の省察
行為のなかの省察	自己との対話
記述する	
内面で対話する	
行為についての省察	行為の理解
現在の行為との関連	
行為への気づき	
省察の成果を実行する	実践の変容
行動の変化	
理論的な実践	理論と実践の関連
実践の理論化	
実践過程への関心	
未来を見据える	未来の実践
レパトリーの広がり	
コンピテンスの発達	専門的自己の発達
専門的アイデンティティの発達	

すでに説明してきたように、省察的実践支援ツールは、道具としての自己活用の促進を意図したものである。しかしこのツールを活用する際には、常に実践や利用者の存在を意識し、それらとの関連で自己をふり返ることが重要となる。その意味で、実践との関連を意識づける項目が得られた意味は大きい。

同様に、方策要素に関しても、『利用者』『システム』というように、自身が対峙している実践において、利用者や利用者を取り巻く固有なシステムを理解できているかを把握する内容から構成されていた。さらに実践のなかで『他者の理解』や『相違の理解』ができているかを確認する内容も含まれていた。これらは、利用者や他のソーシャルワーカー、他職種などの存在とそれらの人びとから得られる視点をふまえて、現状の実践を見つめることを促すものといえる。

また知識要素や方法要素の分析結果からは、ソーシャルワーカーの外部に存在する理論と内部に存在する経験や知という両者へのまなざしとともに、それらを目の前の実践に照らし合わせて捉える重要性がみえてくる。具体的に、『知の包括性』『知の創造』『知識と実践』は、個々の利用者や実践状況に適した知識を活用したり、既存の知識が当てはまらない場合には新たな知識を創りあげたりすることである。そこでは実践や利用者の存在があって初めて知との関連が想定できるのである。同様に『自己との対話』『行為の理解』『理論と実践の関連』も常に目の前の実践を意識したふり返りが求められるだろう。

このように、実践状況と関連づけた自己のふり返りを重視しながら、省察的実践家としての自分自身を客観視することが、省察的実践を促進し、実践を向上されるうえで不可欠であり、分析結果からはそれを具現化する内容を得ることができた。また、それぞれの内容が、相互に関連しながら、省察的実践の向上に寄与している点も特徴といえる。たとえば、知識要素の『理論知』と『実践知』からなる『知の包括性』や『知の創造』は、

理論的な実践を可能にすると同時に、二つの知の相互関連や知の創造によって、実践の理論化にも貢献する。そのように捉えると、知識要素に関する特性を意識することで、方法要素の『理論と実践の関連』の促進にも結びつくと考えられるのである。その他にも、価値要素にみられた『創造性』が知識要素の『知の創造』を、価値要素の『開放性』が方策要素の『協働的対話』や『相違の理解』を強化する要因になる可能性が見い出せる。

また、方策要素にみられた『権力への対応』や、「自己基盤への批判的姿勢」をもった『自己へのまなざし』には、価値要素に含まれる『開放性』や『想像性』が不可欠と考えられる。なぜなら、実践を取り巻く権力構造に気づき、それに対応していくことや、自分への批判的視点には、現状批判を可能にする「開かれた態度」や、異なる角度から自分自身や状況を捉える「広い視野」が求められるからである。また、「想像力」を働かせながら現状に「疑問を抱く」ことは、批判的な視点で現実に向き合っていくための重要な特性と考えられるのである。

そして、省察的実践の最大の目的は、方法要素にみられた『実践の変容』やその成果を『未来の実践』へ活かすこと、それらを通じてソーシャルワーカーの『専門的自己の発達』につなげていくことである。このことは、「省察的実践のプロセスは、経験から獲得した学習が、未来の実践を通して実行される時完結する」(Bruce2013: 72)という指摘からも理解できるだろう。つまり省察的実践は、その成果が現在や未来の実践を変容させて初めて意味をもつ。そしてそれは、他の各要素の特徴が相互関連しながらソーシャルワーカーに取り込まれることで達成されうると考えられる。すなわち、価値・知識・方策の各要素にみられる省察的実践の特徴をソーシャルワーカーが自覚し、体現することで、専門的自己を発達させ、未来の実践に活かされるレパートリーを獲得できるのである。

そこで、この視点から生成されたカテゴリーを

みていくと、『実践の変容』『未来の実践』の向上、『専門的自己の発達』には、価値要素に含まれる『自己認識』や『自己受容』といった自己基盤を強固にし、『開放性』『想像性』『創造性』という姿勢を持つことが、土台として必要となろう。また、多様な『知の包括性』や『知の創造』という知識要素では、理論知と実践知を柔軟に活用しつつ、状況に応じた知を創る力によって、『実践の変容』を可能にし、『未来の実践』を向上できるだろう。同時に、現状を受け入れるだけでなく、『システム』や『権力への対応』、『自己へのまなざし』という批判的な視点も『専門的自己の発達』には重要と考えられる。この点に関しては、省察的実践を提示したSchön自身が、対峙する出来事に対する吟味や戦略の探究だけでなく、「なぜ？」を重視する再帰性（reflexivity）が実践の発達に寄与すると述べている（Bolton2014：47）。

以上のように、各構成指標に着目するだけでなく、それらの相互関連性を意識することで、省察的実践家としての成長に寄与することが期待できるのである。そして、省察的実践家としての成長が、実践の発展につながるとともに、実践の変容を通じて、ソーシャルワーカーは省察的実践家として発達する道筋を見い出すことができるだろう。

2. 省察的実践支援ツールの構造化

最後に、分析から得られたカテゴリーをもとに、省察的実践支援ツールの構成指標の構造化を進め

ていきたい。すでに説明してきたとおり、「省察的実践家」という全体像を、まずは「価値」「知識」「方策」「方法」という4つの領域に分割する。そしてこの4領域に、生成した第2次カテゴリーを構成指標として当てはめていくことになる。その際には、一方では4つの構成要素やエコシステム構想の発想、他方でカテゴリー化された分析結果というように、演繹と帰納の相互性を意識して検討を重ねることが重要となる。そして、そのような観点から構造化したものが図3である。

構造化のプロセスに関して若干説明を加えると、省察的実践の価値要素では、実践への姿勢と自己へのまなざしが特徴であることはすでに述べてきた（図1参照）。その点をふまえて価値要素で生成された7つの第2次カテゴリーをみていくと、『自己認識』『自己受容』『感情への意識』は自己へのまなざしに関する項目であるため、この3つのカテゴリーを「自己」という属性にまとめた。また、『開放性』『想像性』『創造性』『役割意識』は、実践への姿勢を具体化したものと理解できるため、「姿勢」という属性にすることが妥当と考えた。

同様に知識要素に関しては、『理論知』『実践知』『直観』『経験』を知識の「基盤」とし、『知の包括性』『知の創造』『知識と実践の関連』を、多様な知が関連しあう特性として、「関連」という属性にまとめた。また方策要素は、『協働的対話』『他者の理解』『相違の理解』が他者とのかわりに関する

全体	省 察 的 実 践 家							
領域	価 値		知 識		方 策		方 法	
属性	自 己	姿 勢	基 盤	関 連	他 者	クリティカル	行 為	変 容
内容	自己認識	開放性	理論知	知の包括性	協働的対話	利用者	経験への意識	実践の変容
	自己受容	想像性	実践知	知の創造	他者の理解	システム	行為の前の省察	理論と実践の関連
	感情への意識	創造性	直観	知識と実践	相違の理解	権力への対応	自己との対話	未来の実践
		役割意識	経験			自己へのまなざし	行為の理解	専門的自己の発達

図3 省察的実践支援ツールの構成指標

るカテゴリと考え、「他者」という属性とした。一方、『利用者』『システム』『権力への対応』『自己へのまなざし』は、ミクロからマクロを含めたシステムや自分自身に対する批判的な視点を示すものであるため、「クリティカル」という属性にまとめた。最後に方法要素について、『経験への意識』『行為の前の省察』『自己との対話』『行為の理解』は、過去・現在の行為や行為をしながらの思考に関するカテゴリであるため、「行為」という属性に整理した。そして、『実践の変容』『理論と実践の関連』『未来の実践』『専門的自己の発達』は、自身や未来の実践を変容させていくという視点から、「変容」という属性にまとめた。

以上の検討から、省察的实践家の全体は、「価値」「知識」「方策」「方法」の4領域に、さらにそれらが「自己」「姿勢」「基盤」「関連」「他者」「クリティカル」「行為」「変容」という8属性へと分割でき、そして8属性を具体化する29項目を内容として整理することができた。

3. 省察ツール開発に向けた研究課題

これまでの省察的实践支援ツールの構成指標の検討をふまえて、今後の課題には、以下3点があげられる。

- 1) 構成指標に基づく質問項目の作成
 - 2) 質的調査をとおした構成指標と質問項目の精査
 - 3) 省察的实践支援ツールの実践場面での検証
- まず1) 構成指標に基づく質問項目の作成については、分析から生成した構成指標を省察的实践支援ツールに具体化していくために、具体的な質問項目の作成作業が必要となる。なぜなら、省察的实践支援ツールは、構成指標にかかわる質問項目にソーシャルワーカーが回答し、その結果をコンピュータ・シミュレーションにより視覚化することで、ソーシャルワーカーが省察的实践家としての自己の現状を把握したり、利用者支援における改善点を見い出したりするのを支援しようとするツールだからである。そのためには、各構成指

標について、ソーシャルワーカーが、自身の状況をイメージしながら回答できる質問項目が必要となる。

たとえば「自己認識」という構成指標について考えると、「自分と向き合う姿勢がありますか」「自分を理解していますか」「自己理解を深めることができますか」「自分を理解するために工夫をしていますか」というように、ソーシャルワーカーの自己認識に対する姿勢や現状、見込み、取り組みの状況を把握する質問項目を作成していくことになる。こうした質問を、本稿で導き出した29の内容項目それぞれに作成していく作業が次の課題である。

全ての構成指標に関して質問項目を作成した後は、2) 質的調査による構成指標と質問項目の精査を行うことが重要と考えている。なぜなら、省察的实践支援ツールは、ソーシャルワーカーが自分自身やシステムを含めた状況などに関する質問に回答しながら、省察的实践家としての姿勢や取り組みができてきているかを確認するために活用するものである。その活用の可能性を高めていくためには、ソーシャルワーカーによる質問項目への回答をふまえたインタビュー調査の実施が不可欠である。こうした質的調査をとおして、帰納的に省察的实践の理論モデルとツールの開発を進めていきたい。

そして、質的調査により精査した構成指標と質問項目をeスキャナーに組み込むことで試行版のツールを完成させ、3) 省察的实践支援ツールの実践場面での検証へと移っていく。ここでは、ソーシャルワーカーに省察的实践支援ツールを試用してもらい、参与観察などを通じて検証を重ねていく。この検証により、ソーシャルワーカーの省察的实践の支援に即応し、実践場面で汎用性の高いツールであるかどうかを確認していきたい。特に検証では、実践状況や利用者をイメージできるものとなっているかを確認することも重要となるだろう。それは、本ツールが利用者支援から切り離されたものにならないようにするためであ

る。そのため、こうした検証作業が、省察的実践家としてのソーシャルワーカーの専門性の発達や、利用者支援の向上に寄与するツールとしての活用の可能性を広げるうえで不可欠と考えている。

また検証の際には、①使いやすさ（活用方法や質問への回答のしやすさ、視覚的な見やすさ）、②省察的実践家としての自己認識のしやすさ（自己を取り巻く状況の理解、自己課題への気づき）、などを検討していくことも求められるだろう。

V. おわりに

本研究では、省察的実践理論の実践化を目的に、省察的実践支援ツールの開発に向けた構成指標の分析・構造化を行ってきた。それにより、実践理論の曖昧さが指摘される省察的実践において、理論を実践に結びつける手がかりが得られたと考えている。今後は、インタビュー調査などを通じた質的調査と検証を重ねていくことで、実践場面で活用可能なツールの開発を目指していきたい。そして、省察的実践の実践モデルの構築を探究していきたいと考えている。

本研究は、JSPS科研費18K12968の助成を受けたものである。

注：

- 1) 本表は、Bolton (2014: 116) をもとに、筆者が邦訳し作成した。
- 2) 批判的省察 (critical reflection) とは、既存のシステム内でより効果的又は生産的に機能する方法に焦点を当てるのではなく、システム自体の基盤や原則へ疑問を投げかけ、その道徳性を評価し、代替案を検討することである (Brookfield2009: 297)。
- 3) 再帰性 (reflexivity) とは、自身の態度や使用理論、価値、仮説、偏見、慣習的な動作を問うための戦略や、他者とのかかわりのなかでの私たちの複雑な役割を理解するための戦略を見出す

ことである (Bolton2014: 8)。

- 4) 「eスキャナー」とは、太田義弘が主宰するエコシステム研究会と、株式会社伸和トータルエンジニアリングが共同して開発したコンピュータ支援ツールである。
- 5) たとえばCiNii Booksにおいて、タイトルに「reflective practice」と入力して検索すると575件ヒットし、「reflective practice」と「social work」をすべて含むものに限定しても41件ヒットする。またEBSCOhostでは、2005年から2020年に出版されたもので論文タイトルに「reflective practice」を含むものが295件であった (いずれも2020年9月15日現在)。
- 6) 選出した文献は、以下のとおりである。
 - ①Bassot (2016), ②Beverley ら (2007), ③Bolton (2014), ④Boudら (2006), ⑤Bradbury ら (2010), ⑥Brown ら (2005), ⑦Bruce (2013), ⑧Fook (2010), ⑨Gardner (2014), ⑩Gursansky ら (2010), ⑪ Knott ら (2013), ⑫空閑 (2012), ⑬Lymberyら (2007), ⑭Pawar ら (2015), ⑮Ruch (2000), ⑯Ruch (2002), ⑰Ruch (2005), ⑱Schön (1983), ⑲Sicora (2017a), ⑳Sicora (2017b), ㉑杉本ら (2009), ㉒Taylor (2006), ㉓Taylor ら (2000), ㉔Thompsonら (2018), ㉕ Wilson (2013)

文献：

- Bassot, B. (2016) *The Reflective Practice Guide -An Interdisciplinary Approach to Critical Reflection*, Routledge.
- Beverley, A. & Worsley, A. (2007) *Learning and Teaching in Social Work Practice*, Palgrave Macmillan.
- Bolton, G. (2014) *Reflective Practice: Writing and Professional Development*, SAGE.
- Boud, D., Cressey, P. & Docherty, P. ed. (2006) *Productive Reflection at Work*, Routledge.
- Bradbury, H., Frost, N., Kilminster, S. &

- Zukas, M. (2010) *Beyond Reflective Practice: New Approaches to Professional Lifelong Learning*, Routledge.
- Brookfield, S. (2009) "The concept of critical reflection: promises and contradictions", *European Journal of Social Work*, 12 (3), 293-304.
- Brown, K., Fenge, L. & Young, N. (2005) "Researching Reflective Practice: An Example from Post-Qualifying Social Work Education", *Research in post-compulsory education*, 10 (3), 389-402.
- Bruce, L. (2013) *Reflective Practice for Social Workers*, Open University Press.
- Fook, J. (2010) "Beyond reflective practice: Reworking the 'critical' in critical reflection", Bradbury, H., Frost, N., Kilminster, S. & Zukas, M., *Beyond Reflective Practice: New Approaches to Professional Lifelong Learning*, Routledge, 35-51.
- Fook, J. (2016) *Social Work: A Critical Approach to Practice*, SAGE.
- Gardner, F. (2014) *Being Critically Reflective*, Palgrave Macmillan.
- Gursansky, D., Quinn, D. & Le Sueur, E. (2010) "Authenticity in Reflection: Building Reflective Skills for Social Work", *Social Work Education*, 29 (7), 778-91.
- 保正友子 (2015) 「ソーシャルワーク実践における相談面接記録の方法：意識的な記録作成の必要性」『ソーシャルワーク研究』41 (1), 18-24.
- Ixer, G. (2016) "The concept of reflection: is it skill based or values?", *Social Work Education*, 35 (7), 809-824.
- 加藤由衣 (2019) 「省察的実践の実践モデル構築に関する一考察—ソーシャルワーク実践の構成要素からの検討—」『高知県立大学紀要 社会福祉学部編』68, 56-69.
- 北本佳子 (2010) 「実践現場におけるソーシャルワーク演習—実践コミュニティによる学習の方向性」『ソーシャルワーク研究』36 (2), 126-133.
- Knott, C. & Scragg, T. (2013) *Reflective Practice in Social Work*, SAGE.
- 空閑浩人 (2012) 『ソーシャルワーカー論—「かわり続ける専門職」のアイデンティティ—』ミネルヴァ書房.
- 黒木保博・山辺朗子・倉石哲也編著 (2002) 『福祉キーワードシリーズ ソーシャルワーク』中央法規.
- Lymbery, M. & Postle, K. (2007) *Social Work - A Companion to Learning*, SAGE.
- 南彩子・武田加代子 (2004) 『ソーシャルワーク専門職性自己評価』相川書房.
- 太田義弘 (1989) 「実践理論としてのエコシステム構想の展開」『社会問題研究』39 (1) 23-51.
- 太田義弘 (2003) 「ソーシャルワークの臨床的展開とエコシステム構想」『龍谷大学社会学部紀要』22, 1-17.
- 太田義弘・中村佐織・石倉宏和編著 (2005) 『ソーシャルワークと生活支援方法のトレーニング』中央法規.
- 太田義弘・中村佐織・安井理夫編著 (2017) 『高度専門職業としてのソーシャルワーク—理論・構想・方法・実践の科学的統合化』光生館.
- Pawar, M. & Anscombe, B. (2015) *Reflective Social Work Practice*, Cambridge.
- Ruch, G. (2000) "Self and social work: towards an integrated model of learning", *Journal of Social Work Practice*, 14 (2), 99-112.
- Ruch, G. (2002) "From triangle to spiral: reflective practice in social work education, practice and research", *Social Work Education*, 21 (2), 199-216.
- Ruch, G. (2005) "Relationship-based practice and reflective practice: holistic approaches to contemporary child care social work", *Child and Family Social Work*, 10, 111-123.
- Schön, D. A. (1983) *The Reflective Practitioner*,

- Ashgate.
- Schön, D. A. (1983) *The Reflective Practitioner*, Basic Books (=2001, 佐藤学・秋田喜代美訳『専門家の知恵 反省的実践家は行為しながら考える』ゆるみ出版).
- Sicora, A. (2017a) *Reflective Practice and Learning from Mistakes in Social Work*, Policy Press.
- Sicora, A. (2017b) "Reflective Practice, Risk and Mistakes in Social Work", *Journal of Social Work Practice*, 31 (4), 491-502.
- 杉本貴代栄・須藤八千代・岡田朋子 (2009) 『ソーシャルワーカーの仕事と生活－福祉の現場で働くということ－』学陽書房.
- Taylor, B. J. (2006) *Reflective Practice for Healthcare Professionals*, Open University Press.
- Taylor, C. & White, S. (2000) *Practising Reflexivity in Health and Welfare*, Open University Press.
- Thompson, S. & Thompson, N. (2018) *The Critically Reflective Practice*, Palgrave.
- 戸塚法子 (2002) 「エコマップ」黒木保博・山辺朗子・倉石哲也編著『福祉キーワードシリーズ ソーシャルワーク』中央法規, 98-99.
- Wilson, G. (2013) "Evidencing Reflective Practice in Social Work Education: Theoretical Uncertainties and Practical Challenge", *British Journal of Social Work*, 43, 184-172.

